
Evening glowが最後の記憶

悪者はいない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Evening glowが最後の記憶

【Nコード】

N2346W

【作者名】

悪者はいない

【あらすじ】

夢からの片思い。同じ魂が廻り合い、やっと対面した。なのに、何で泣いてんだろ…わかんね。

輪廻転生（前書き）

暗いお話です。

腐向けです。

死ネタです。

主人公泣いてばかりです。

苦手な方はバックプリーズ。

大丈夫な物好きな方はどうぞ。

↓

輪廻転生

これは夢。

最近よく見る、全部同じ夢。

餓鬼の頃からちよくちよく見てはいたが、大学生になってから頻繁に見ている。

壊れたビデオのようにリピートされる夢。

「様。こちらは日当たりが良いですよ。」

「そうだな○○○○。ありがとう。」

「いえ、貴方様が喜んでくださるのが本望ですので。」

「ハハッ！そうか。」

顔がばやけて見えない。

俺の顔も相手の顔も、互いの名前も。

二人して笑い合ってる。

幸せな空間。

主従関係なんだって言葉遣いでわかる。

信頼しあってるって空気でわかる。

お互い好きなんだな、って何となく感じる。

互いの手を絡める指先とか、寄り添う肩とか、何故か俺の胸が温かいから。

けど、ここで映像が一変するんだ。

次は戦場。

は泣いていて、○○○○は腕の中で虫の息だ。

○○○○は大怪我をしていて、血が沢山流れてる。

二人共鎧を身につけていた。

二人の周りには似たような鎧を着た死体の残骸。

戦争は終わつたらしい。

「○○○○！！しっかりしろよ！何で、俺の前に……」

「様、お怪我はありませんね？」

「馬鹿野郎！喋るんじゃねえよ！！」

「私は、もう死にます。せめて、様の笑顔を瞼の裏に、焼き付けたいです。お願いします。笑って、。」

「ッヒ、○○○○……また今度、次は、戦争しなくて済む世界で会うぞ。」

「……フフツ、貴方様のご命令ならば何処までも。」

「絶対、絶対だぞ！ちゃんと守れよ！！○○○○！！」

「ありがとう、また、来世で……」

主っぽい人は大声で泣き叫ぶ。

○○○○は死んだらしい。

彼の腕の中で、幸せそうに涙を流して。

は地面に突き刺した剣を泣きながら握み、心臓に刺した。

幸せだった二人は、戦争で亡くなった。

寄り添いながら眠るように。

俺も何故か涙が止まらないんだ。

——パチ。

見慣れた天井。

ベッドの上に仰向けで寝ていたらしい。

目から流れる温かいものは止まらなくて、胸がズキズキと酷く痛む。

そうだ、大学に行かなくては。

そろそろ家を出ないと遅刻してしまう。

一人暮らしのマンション。

洗面台で顔を洗えば涙は止まり、慌てて家を飛び出した。

スポーツ推薦で入学した俺は毎日走っている。

大学のコーチにスカウトされた奴らは他にもいて、毎日が試合だ。

「夜！こっち来い！」

「日向コーチ。」

走り終わった帰り道、日向コーチに呼び出された。

彼は心配そうに俺を見下げる。

「お前最近目元が腫れてんぞ。何かあったか？」

「いえ、悪い夢が続いているだけです。体調に関係ありませんから、気にしないで下さい。」

「……お前泣きそうな顔してんぞ。周りは気づかないフリしてくれてっけど、コーチとしてメンタル面もサポートしてやる。」

「……大丈夫ですよ。辛くなんかありません。」

嘘ついた。

本当は、あの夢を見る度に全身が泣いている。

愛しい人を失った　　の感情が俺に流れ込み、無理矢理共感させられるんだ。

辛い、痛い、苦しいよ。

あんな夢、もう嫌だ。

嫌いだ。

大っ嫌いだ。

けれど、○○○○が気になって仕方ない。

どこかで今の○○○○を探している自分があるんだ。

じゃなく、○○○○を。

理由なんかわからないよ。
俺が教えてほしいくらいだ。

気づかない内に泣いていた。
心配かけないよう俯く。

下唇を噛み締めて、声を押し殺す。
無意味だけど片腕で顔を隠した。

これで顔は見られない。

「すみません。俺、帰ります。」

「話してみる。」

「すみません。意味不明な事なんで、本当大丈夫です。」

「大丈夫じゃないから、聞いてんだよ。」

腕を掴まれて走れない。

ぐちゃぐちゃの顔を見られたくなくて、更に顔を下に向ける。

日向コーチはクシャと髪を撫でてくれた。

その優しさが俺には苦しい。

甘えてしまう。

「大学生になって、毎日同じ夢を見るんです。俺は終始傍観している夢。」

二人の人間が、恋人同士が、最初は幸せそうに丘の上にいるんです。主従みたいですけど、空気で好き同士なんだなってわかるくらい。けど、場所が一瞬で変わって、そこは戦場で。従者だった人は主っぱい人の腕の中で虫の息で、血が沢山溢れてて。周りは全員死んで、二人だけで。主っぱい人が『来世でまた会うぞ』って言うんです。従者の人は『貴方様のご命令ならば、何処まででも』って答えるんです。そこで従者は死んでしまっ。主っぱい人は泣くんです。周りに響き渡るように泣き叫ぶんです。その人の感情が、俺の中に

流れ込んできて、俺も涙を流してて。主っぽい人は剣を握って、心臓に刺して自殺します。けれど、二人共泣いているけど、幸せそう。で。また次の世界を夢見ていて。そこで毎回目が覚めるんです。俺は涙を流してるんです。胸が痛くて、凄く辛くて、頭の中は従者の人の事ばかりで。理由はわかんないけれど、今の従者を探している。主じゃない、従者の方を。顔は夢の中じゃばやけてわからないけど、ずっと探してる。「魂」が、彼を見つけ出そうとしているんです。」

日向コーチに全て話した。

意味不明なのが多いけど、頭が良くない俺にはこれが精一杯。思っているモノ全て吐き出した。

呆れて、不気味がられて、もう走れないのだろうか。

日向コーチの顔を見れない。

恐くて恐くて、腕を離してほしい。

コーチはずっと黙っている。

夜のグラウンドはとても静かだ。

二人だけの場所。

風が吹き抜け、砂埃が舞い上がる。

日向コーチが顔を歪めて見下ろしてるなんて気づいてない俺は、地面に涙を落とすだけ。

夢の人を思っで、恋して、寂しさに耐え切れなくて。

現世に生きている従者を見つけるまで、きっとこれは永遠に繰り返される。

輪廻を独り、走り回るように。

輪廻転生（後書き）

続きは皆様の妄想で補って下さい。

もし少なからず好評だったら、もしくは作者の気まぐれが発動しましたら、続編書きます。
多分ですが、ね（笑）

ありがとうございました。

隔靴搔痒（前書き）

作者の気まぐれ発動！

いや、それよりもアクセス数が予想を超えてましたので、書いてみました。

皆さん趣味に素直ですね↑

暗めです。

腐向けです。

オチなしです。

自己判断でお進み下さい。

では、物好きな趣味に素直な方はどうぞ。

↓

隔靴搔痒

何時も見er夢の内容が変わった。

それは日向コーチに打ち明けた夜から。

今まで同じ映像ばかりだったのが、その夜からずっとこの映像。

やっぱり俺は傍観しているだけ。

名前も顔の殆どもぼやけてわからない。

顔は口元だけしかハッキリしていない。

俺は〇〇〇〇の顔が知りたいのに。

「様、私は戦争が終わればこの役職を辞退しようと思います。」

「…何故だ？俺が嫌いになったのか？」

「そんな事、私がもし魔術に操られても、様をお嫌いになる事は有り得ません。」

「だったら、辞めるなよ。俺の傍にいてくれよ。」

「ええ、いますとも。私の命が尽きるまで。」

「……矛盾してるぞ？変な物でも食べたのか？〇〇〇〇。」

「私は至って普通です。」

様。」

広いテラスのような場所に二人だけ。

遠くには煉瓦で造られた街。

更に奥には丘と山などの自然が。

〇〇〇〇は頭を悩ませるに優しく笑む。

愛しい者を見つめる時の笑顔。

恋人同士の柔らかく温かい空間。

がいるだけで〇〇〇〇は嬉しそう。

無邪気なも、〇〇〇〇が傍にいただけでじんわり胸が温かい。

俺の胸も温かい。

〇〇〇〇は唇を引き締め、きつと真面目な顔をしている。

「私は、戦争の勝利後、様を攫います。そして、小さな村で一生二人で暮らす予定です。すると、今までのような豪勢な暮らしは出来ませんし、毎日働かなくてはなりません。主従関係が無くなり、私は『』と呼ぶしかありません。」

私は、“主従”という鎖で繋がった関係は、もう嫌です。ですから、この犯行予告を聞いて、貴方様をご判断下さい。私を今すぐ辞めさせるか、私をこの場で殺すか、また」

「行く！一緒に、〇〇〇〇と逃亡する！俺を一人にさせるな！お前がいなきゃ、俺は一人ぼっちだ…。政略結婚させられて、好きでもない奴を娶るのは嫌だ！！」

「……後悔しませんか？」

「お前が俺を幸せにしなかったら後悔する。」

「ならば大丈夫です。一生をかけて幸せにしますから。」

「絶対だぞ。」

「はい、。」

二人は笑いあって、口づけをする。

〇〇〇〇は より高いから が背伸びしなくちゃならない。けれどその苦労さえも二人は愛しく感じる。

抱きしめ合う二人は、これから先の幸せを夢見るように語り合う。

ここで、景色は一変する。

あの戦争が。

二人が死ぬ場面が。

俺が忘れないように。

俺が〇〇〇〇を求めるように。

俺が〇〇〇〇を探すよう促すように。

果たせなかった約束を、今の俺が叶えさせるように。

――パチ。

見慣れた自分の部屋の景色。

ベッドの上で横になって寝ていたらしい。

目から流れるモノは止まらなくて、胸の痛みも治らない。

そろそろ涙を止めないと脱水症状になるから、顔を洗いに起き上がった。

今日は久しぶりに何も無い日。

休みの日なのだから、今日は部屋の掃除をしよう。

シーツが涙で染になってしまってるから。

シーツや洗濯物を洗濯機に投入。

乾燥機付きだから干さなくて良い。

重宝してる。

その間部屋の片付け。

散らかってる漫画やゲームを元の場所に移動。

弁当やお菓子とかのゴミを袋に入れてゴミ捨て場所に。

ベッドは除菌スプレーで。

掃除機で掃除していると、携帯電話が鳴った。

メールの音楽。

誰だろ、親友の拓哉かな？

開くと、意外な人からだった。

「日向だ。今お前の部屋の前にいる。」

……へ？

何で日向コーチが？

手にある掃除機を投げ捨て、つまずきながらも玄関の扉を開ける。

扉に体当たりする勢いで開けるがチェーンをしていたのを忘れて、
衝撃が跳ね返る。

「大丈夫か？」

「は、はい…すみません。」

「手土産のケーキ屋のプリン。夜は甘い物好きだろ。」

「わあ、ありがとうございます。」

箱に入ったプリンを受け取り、日向コーチを家に招く。

部屋の惨状を思い出し、慌てて掃除機を片付ける。

大笑いする日向コーチを後ろに、顔を赤くさせてテーブルを出す。
恥ずかしい。

こんな思いするんだったら、普段から掃除しておくんだった。

拓哉だつたら気にしないのに。

まだ喉を鳴らして笑ってる日向コーチは胡座をかいて座る。

俺は羞恥心から正座。

三つ入ったプリンを二つ取り出し、プラスチックのスプーンと共に

二人の前に置く。

しかし、何の用で日向コーチは俺の家に？

俺何かしたつけ？

くそう、まだ笑ってる。

横目で睨むように日向コーチを見る。

……あれ？

「悪い悪い。笑い上戸で一度笑うと止まらないんだ。

今日は、“突撃日向コーチ訪問”一日目だ。」

「二日目があるんですか！？」

「まあまあ、それはお前次第だ。

で、最近悪夢はどうだ？泣き腫らした跡が無い日に会えるのはまだ
みてえだな。」

「はは…すみません。」

その事でわざわざ家庭訪問してくれたのか。
申し訳ない事をした。

講師やコーチの仕事で忙しいのに。

たった一人の生徒に気を遣わせてしまう。

心配かけないよう、出来るだけ明るく笑む。

これだけは完璧なんだ。

「もう平気ですよ。日向コーチに話してから、見なくなりました。
ただの疲れからでしょう。」

心配かけてごめんなさい。」

「……お前って嘘つく時、絶対笑うよな。」

「へ？」

「心配かけたくないんだろうけど、お前は人に殆ど甘えねえだろ。
あんまし溜め込むな。体壊すぞ。」

「……すみません。悪夢は、本当は毎日見えます。けど、内容が変わりました。」

「ほう、どんなだ？」

日向コーチはプリンを食べながら話を促す。

俺は拳を膝の上で握りしめ、俯いたまま話す。

同じ二人の男の事。

顔の口の部分だけハッキリ見えるようになった事。

二人の会話。

〇〇〇〇の約束。

の返事。

幸せそうな二人。

また景色が変わり、戦場になる事。

これは前と同じ映像という事。

毎朝涙を流している事。

胸が痛く苦しい事。

〇〇〇〇を探したい事。

〇〇〇〇に恋心を抱いている事以外は、全て話した。

日向コーチは、黙って最後まで聞いてくれていた。

意味不明な内容なのに、真剣に。

空気を変えるように、苦笑しながら喋る。

「俺、どうかしてますよね。忘れて下さい。あ、コーヒー煎れます。」

「この話、他の奴には？」

「あ、日向コーチだけです。拓哉や家族には、ちょっと……」

「拓哉には止めておけ。後々面倒になるから。」

「？わかりました。」

拓哉と親友なのを日向コーチは知っている。

スカウトに来た時、拓哉も一緒だったから。

何故かお互い驚いた顔してたけど。

それから拓哉と日向コーチが会ったかは知らない。

ブラックコーヒーを二つテーブルに置く。

勿論インスタントコーヒー。

日向コーチは考える仕草をして、俺は空になったプリンをごみ箱に捨てる。

空を見上げると、青かった空が橙色に変わっている。

大分時間が経っていた。

この橙色の夕焼けは、どこか戦場の時の空に似ている。

寂しくて、切ない気持ちにさせる、色。

ポツリと呟いた。

「この夕焼け、戦場の時と似ています。」

「…確かにな。」

「え？」

「あ、いや、戦場でよくありそうな夕焼けだなあ、と思ったから。悪い悪い。」

「そうですか。」

あ、後一つ。」

「何だ？」

「日向コーチの口元、何だか従者の方に似てます。優しい感じが。」
「……………」

俺が嬉しそうに語ると、日向コーチは驚愕の顔を作る。

俺はその予想外の反応に驚いて、固まってしまった。

お互い、沈黙。

外からは車の音や鳥の泣き声。

オレンジの光が部屋に差し込み、夕刻いう事を教えられる。

日向コーチは何か言おうと口を開いて、しかし迷いがあるのか再び閉じられた。

頭をブンブン振り、日向コーチは深い溜息を吐いた。

俺は一つの疑問が頭を過ぎる。

家を知っていたのはまだいい。

名簿に登載されているから。

ケータイのアドレスと電話番号は本人と交換した。

家庭訪問も、きっと他の奴にもしている。

…けどさ、俺は何時、日向コーチに“甘い物が好き”と言っただろうか？

練習中は水分補給しかしていない。

食堂で甘い物食べた記憶もない。

拓哉に貰って食べたとしても、日向コーチは見えてないはず。

……………どうして？

教えて下さい、日向コーチ。

貴方を見ていると、じんわり胸が温かいです。

〇〇〇〇の笑顔の時みたいです。

隔靴搔痒の感が、今あるんです。

どうか貴方から教えて下さい。

隔靴搔痒（後書き）

カッカソウヨウ
隔靴搔痒、意味はご自分でお調べ下さい。

いやあ、まさか続編を書くとは思っていませんでした。皆さん変わってますね↑お前もだ

一応、夜が気づき始めました。日向コーチは悩め悩め。フヘヘヘ↑
拓哉と三角関係だったら美味しい、と思ってみたり。だから名前だけ登場。

まあ、続編を書くかはアクセス数次第。また予想を上回れば、『作者の気まぐれ発動』かもしれせん。まあ、気長に。

ありがとうございました。

紆余曲折（前書き）

時間が大分経ちましたが、気付いたらアクセス数が異常でした笑
何コレ恐い。四度見した私はやはりチキン。

残念クオリティです。

暗いです。

泣いてばかりです。

腐向けです。

それでもよろしい変態なお姉様方どうぞ！

↓

紆余曲折

夢を、みなくなった。

所々ボヤけた夢を。

まるで誰かに隠されたかのように。

まるで誰かに奪われたように。

あの日、俺の部屋で日向コーチに話した日から。

何となく日向コーチの違和感に気づいた夜から。

スッパリと。

夢が消えた。

「……」

辛い夢を見なくて済んだ。

なのに…何故？

何でなんだ？

涙が溢れて止まらない。

あんなに夢を見ることを嫌がってたのに。

心臓が痛くて辛くて寂しい思いをせずにいるのに。

もう泣かないでいられると思ってたのに。

何で俺は泣いている？

理不尽だ。

もう何だよ。

俺の魂が○○○○を求めているからか？

○○○○に恋したからか？

夢の中の優しい○○○○に会えないからか？

の恋人の○○○○が見れないからか？

俺が、気づいたから？

日向コーチが誰だったのかを。

あの人が、もしかして……。

大学で日向コーチが目を合わせてくれなくなった。

他の奴らには普通にしてるのに。

俺だけ避けられてる。

話しかけても気まずそうな顔をする。

俺も泣きたくなった。

他の仲間は励ましてくれたりする。

理由は聞かない。

優しい仲間の言葉は傷心の俺を泣かせる。

何度も何度もお礼を言った。

けれど、日向コーチとの距離は縮まらない。

食堂で親友と一緒に食べる。

拓哉と会話しているのに目はあの人を探してる。

しかし見つからない。

溜め息の回数ばかり増える。

暗い俺を拓哉は心配してくれる。

理由を聞かれるが曖昧に返してばかり。

なるべく笑うようにしてるのに。

笑顔だけは得意だったのに。

周りに迷惑ばかりかけてしまう。

心配かけてばかりだ。

駄目だな、俺。

どうしようもない。

あの人が恋しくて堪らない。

辛いよ。

○○○○の笑顔を思い出しただけで、呼吸がままならなくなるほど。
俺の魂が、
が探してるんだ。

俺はどうすればいいんだろう。

この場所から動けない俺は、待つしかないのだろうか。
拓哉と食堂で別れた後、トイレの個室で一人泣いた。
お願いします。

日向コーチ。

早く答えを教えてください。

でなきゃ、俺は涙で干からびそうです。

片思いで死ぬのは、嫌です。

助けてください。

練習終わりの帰り道。

すっかり暗くなった大学を一人で歩く。

今日も日向コーチは目を合わせてくれなかった。

大学の門の近くまできて気づいた。

更衣室に携帯電話を置いてきてしまった。

疲れた足に鞭を打ち、急いで更衣室に戻った。

ーバン！

慌てて更衣室の扉を開ける。

すると驚いた表情の日向コーチと対面。

まだいたんだ。

久しぶりに視線が交わった気がして嬉し涙を流す。

何で泣いてるのかわからない。

勝手に涙が流れるんだ。

俺の意思を無視して。

きつと が嬉しがってるんだ。

だって、胸が温かいから。

夢の時のように。

じんわりと広がる心地よい熱。

口が勝手に動く。

「やっと、見てくれた。寂しかった。一人にしないって言ったのに。俺は今、一人ぼっちだぞ。どうしてくれる。嘘つき。」

「……記憶が戻らなければ、貴方様は私を忘れ、“また”女性と幸せな家庭を築きます。どうか、私の勝手な我が儘を受け入れて下さい。」

「“また”？」

お前は、それを黙って見届けていたのか？俺に飽きたのか？なら何故このような形で記憶を掘り起こしたんだよっ！！」

ガァン！

深々と頭を下げる日向コーチ。

勝手に喋る唇。

勝手に動く身体。

俺はまた、夢の時のように傍観している。

が力一杯ロッカーを殴る。

けど、〇〇〇〇はずっと頭を下げ続ける。

暫く沈黙が続く。

酷いよ。

何も知らずに結婚する俺を黙って見守っていたなんて。

悲しいのはお前だろ？

何で邪魔してくれなかったんだよ。

お前が幸せにしてくれるなら、俺はどんな場所でも良かったのに。幸せに出来る覚悟がなかったのか？

そんなに俺は、ダメな奴だった？

…何とか言えよ。

頭の中がぐちゃぐちゃでワケわかんない。

く　　く　　く

日向コーチの手にあるケータイが鳴る。

この音楽は俺のケータイの着信音。

確認するとやっぱり俺のケータイ。

拾っておいてくれたのだろうか。

ならば返してほしい。

しかし、いま俺の体は　　のモノ。

俺の意思は通用されない。

夢のように俺は何も出来ない。

は唇を噛み締めて泣いている。

困った顔でケータイを差し出す○○○○。

はそれを払い落とした。

ガシャン！

嗚呼、壊れたような音がする。

八つ当たりするなよ。

物は大切にしろ。

もう電車に乗り遅れたし。

歩いて帰らないと。

…もう、無理だ。

違うことを考えようとしても、○○○○が目の前にいるだけで頭が

支配される。

胸がジクジク痛む。

何で○○○○はこんなに辛そうな顔をしているんだ？

だって苦しいのに。

そんなのを見せられたら、自分が悪いみたいじゃないか。

いや、実際に悪いのは俺か。

ケータイなんか忘れなきゃ、こんな事態にはならなかった。

俺が、全て悪い。

生まれた俺が全部。

片思いしてしまった俺が…原因だ。

手の平で顔を隠しても何も変わらない。

〇〇〇がケータイを拾う前に先に取る。

傷付いたケータイの汚れを払いポケットに。

グイッと涙を腕で拭い、なるべく綺麗に笑う。

素直じゃなくてごめんなさい。

「俺、輪廻を断ち切ります。だから……さようならヒュウガ。」

夢の中で恋した人。

優しい人。

大切にしてくれた人。

大好きだった人。

変わった世界で、離ればなれになった人。

ありがとう。

約束を覚えてくれてて。

とても俺は嬉しかった。

だからね、さようなら。

お互いを苦しめる“重り”は外さなきゃ。

二人が傷付くだけでしょ？

だからこそ、言い出しっぺの俺が終わらせなきゃダメだ。

「ヨル様…？一体、いま何を考えて、いますか？」

「今度、俺は違う人間になって生まれる。大学卒業したら、あの綺麗な夕焼けが最期の戦場”に行こうかな。」

「ま、待つてください！何故貴方様が自殺しなくてはならないのですか！？私は貴方様には幸せになってもらいたくて」

「触るな！！」

後少しで触れそうになった瞬間に叫んだ。
ビクッと跳ねた肩を見て自分が傷付いた。
ほら、どんどん俺を嫌えばいい。
そして見向きもしなくなればいいんだ。
それが、最善の方法。
弱い俺の精一杯の拒絶。

――ザリッ。

踵を返して走り出す。
ヒュウガは止めない。
俺も止まらない。
ヒュウガが望んだ未来なんかに従わない。
紆余曲折のまま終わってやる。
入り組んだ運命の道を永遠に迷子になるから。
心配して追いかけても、もう遅い。

紆余曲折（後書き）

ウヨキョクセツ
紆余曲折

またご自身で意味を調べてくださいませ。

ヨル
夜君がキレました。 日向^{ヒュウガ}コーチはこれからどうするのか、見物です
(ジュール[↑])

拓哉登場しましたが影薄いな。拓哉も夜の仲間もみんな優しいな笑
思わず笑ってまった。

続きを書くかはアナタの一読 and 私の気まぐれにかかってる（キラッ

変わり者さんカモン！！でも、あまりアクセス数増やさないでほしい、な[↑]

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2346w/>

Evening glowが最後の記憶

2011年10月9日14時57分発行